

一三、明治二十二年大紀事

解説

これは福富忠也氏の兄・忠恕氏によって、東京憲兵隊の罪紙（和紙縦書き）三百枚余に墨書された、B5判の手書きの和綴本である。著者忠恕氏は忠也によれば、

兄は余の為に異母兄弟であつて少年の頃より東京へ遊学して陸軍に職を奉じ、東京、青森、仙台、大阪、広島、熊本等に転職して、明治十年西南の変には教導隊生徒で以て出軍し、后勲七等に叙され白色桐葉章を賜りました。そして明治二十四年に職を辞して今日に及んだのであります（一四号「吾半世紀」より）。

という。教導隊は西南戦争当時すでに教導団と称していたが、同団は軍人志願者の優秀な者から採用した下士官養成機関であった。東京憲兵隊の罪紙を用いているのは、明治二十二年当時同隊に所属していたからだと思われるが、定かではない。本文にも自分の地位に関する記述はない。ただ二十四年に辞職していることから陸軍奉職中に書かれたことは確かである。

内容は表紙に記されているように、「宮城御移転、憲法発

布、森大臣負傷、大隈大臣負傷、立皇太子宣下、内閣更迭」の六項目である。一陸軍軍人の見た明治二十二年を叙述したものであるが、同年二月十一日は日本が近代的な文明国家になった証ともいふべき明治憲法が公布された日であり（当日は東京憲兵隊は兵員総出で市中警戒に当たっていた）、翌年には初の衆議院選挙が控えていた。その一方では森有礼文部大臣が凶刃に仆れ、大隈重信外相が条約改正問題で暴漢に遭難する。「明治二十二年ハ多望ニシテ多忙」と年頭に書いた通り多事多難な年でもあつたが、希望あふれる明治ナシヨナリズムの健全なる精華と当時の日本人の熱気を、詳細な記述とともに本文の全編に見出すことができる。

内容は各項目とも氏が直接見聞したものもあるうが、多くは文末が「ト云フ」とか「・・ト」で終わる伝聞調となっており、しかも叙述の根拠となつたものが何であるかの明示はないのが残念である。ただ内容的には新聞等では知ることのできないかなり高度な情報も含んでおり、忠恕氏の職掌柄知りえた情報であることを推測させる。例えば刺客西野文太郎が森有礼に与えた傷の様子や、西野自身の「死体創傷検案書」はその筋から情報を得なければ分からないものである。